2024 年 12 月 29 日　説教「この望みによって」

ローマ人への手紙 8 章 18～25 節

先週にはクリスマス礼拝をささげ、本日は年末礼拝です。2024 年の当教会の標語聖句は「神を待ち望め」（詩篇 42:5）でした。今朝は、この御言葉に関連して、ローマ人への手紙から学びます。救済論が記されているこの書。1 章から 8 章までが、救済論の中心です。そして、8 章はそのクライマックスに当たる部分です。8 章の途中を切り取って学びことになり、少し唐突ではありますが、学んでいきましょう。

１．栄光に比べれば（18～19 節）

①いろいろの苦しみ（18）**「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」**

人生にはいろいろな苦しみがあります。クリスチャンにも苦しみはあります。また、それは年齢とは関係がありません。生きているかぎり、苦しみを与える原因が出てきます。しかし、ここでは「将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りない」というのです。栄光とは、光、輝き、恵み、まこと、誉れといったものです。将来与えられる栄光は、いかなる苦しみよりも、まさって余りあるというのです。

②切実な思いで（19）**「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」**

被造物とは神によって創造された存在のことです。山も川といった自然も、動物も、神によって造られた存在は一つの方向を向いているというのです。それも切実な思いをもって、待ち望んでいるというのです。早速、今年の御言葉に関係する「待ち望む」という言葉が出てきました。神の子どもたちの現れを待望しているというのです。被造物はそろって、神をほめたたえるクリスチャンの現れを待望しているというのです。

２．御げ（20～22 節）

①被造物が虚無に服したのは（20）**「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」**

ここで被造物というときには、罪多き人間のことなのか、それともすべての被造物をさしているのかという問題があります。わかりやすくするために、ここでは被造物を罪人なる人間としておきます。罪人が虚無に服するとは、あのソロモンが伝道者の書で述べているように、「空の空、いっさいは空である」ということであります。生きることに意味を見いだせない。神なしの世界に陥ってしまっている状態です。ここには、それは人間の意志ではなく、服従させた神からきているとあります。そして、だからこそまだ罪人にも希望が残っているというのです。

②栄光の自由の中に（21）**「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」**

被造物は、空虚さの結果である滅びの道と、その束縛の中に、苦しんでいるわけです。しかし、やがてそこから解放されて、神の子どもたちの栄光の自由の中にいられるというのです。つまりは、罪に支配されていた者たちが、神の子どもたちが受ける救いの道に入れられ、光り輝く神からの自由の中にいられるというのです。

③産みの苦しみを（22）**「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」**

ここでは、被造物がどのような状態にあるかが述べられています。彼らはうめいているというのです。うめき声が聞こえてきます。声を出さなくても、心のなかではうめいているのです。しかし、それは産みの苦しみだとも言えます。何かが産み出されようとしているのです。

３．贖われることを待ち望む（23～25 節）

①子にしていただくこと（23）**「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」**

この節からは、キリストによって導かれている人、「御霊の初穂をいただいている」人に焦点が合わされます。つまり、クリスチャンも心の中でうめいているというのです。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」（14 節）とありますが、そのような者たちも真の底から神の子にしていただくことを切実に願っているというのです。つまり、クリスチャンもからだ（存在）がその実質までも贖われることを待ち望んでいるというのです。何からなにまでキリストに買い取られることを待ち望むと言うのです。

②目に見える望みではなく（24）**「私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むのでしょう。」**

クリスチャンも世の魅力に惹かれ、時にはその捕虜になってしまっている場合があります。しかし、クリスチャンもその存在の中心からキリストの贖いをいただくときに本当の平安があるのです。目に見える望みは肉の側につけば、魅力的に見えます。しかし、それは本当の望みではないというのです。それはすでに見えているのですから、手に入っていないとしても希望にはならないというのです。私たちのからだ（存在）がその根本から贖われ、新しくされるなら、そこにこそ真の喜びがあるのです。この望みによってこそ、人は救われるというのです。

③熱心に待つ（25）**「もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」**

まだ見えていないもの、それにこそ価値があることを認めとします。また、そこに希望があることを受け入れることになるなら、そのクリスチャンはどんなことがあっても忍耐し、その価値あるものを受けることを願って、それを待ち望んでいくというのです。

《結論》

今年の御言葉は「神を待ち望め」（詩篇 42:5）でした。その詩人は「わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。思い乱れているのか。」と自らを叱咤するようにしたうえで、「神を待ち望め」と述べました。ここまで学んできて、この詩人は神を見上げる者たちにとって、本質的で、正直な側面を吐露してくれています。すなわち、クリスチャンになれば、うなだれたり、思い乱れたりすることがないと思われる向きもあるかもしれませんが、実をいうとそうではない。ちょっとよそ見していれば、たちまちにサタンに誘いに惑わされて、下を向き、絶望的な考え方に包まれていきやすいのです。それは、このローマ書 8 章のなかにも記されています。23 節において、キリストにある者も「心の中でうめいている」とある通りです。ですから、人はクリスチャンであろうと、うなだれやすい存在であることを、まずは認めていきたいのです。

それは、18 節にもあらわされています。「今のときのいろいろな苦しみ」とありますが、これはクリスチャンにとってそのようであることがあることを伝えています。本当に現実は厳しく、将来にも展望が開かれず、クリスチャンにも様々な苦しみが襲って来るのです。20 節には「虚無に服する」とあって、神から目を離せば、人間に襲ってくるのは虚無感なのです。ある人は言うでしょう。そんな思いつめないで、面白おかしく生活すれば良いのではと。しかし、あのソロモンは世の人が得たいと思っているあらゆるものを手にいれました。事業、邸宅、広大な園、奴隷、金銀、様々な快楽、知識・・・。しかし、伝道者の書の冒頭で彼は告白しました。「空の空、すべては空」「すべての事はものうい。目は見て飽きることもなく、耳は聞いて満足することがない」等々。ソロモンの結論は、「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」（12:13）でした。

詩篇 42 篇の作者は、うなだれやすい自らに向かって「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。」と記しました。

その方向はローマ人の手紙でも同じですが、パウロはそれをさらに進めています。うめきなどの産みの苦しみを経て、人が究極的に求めるのは、「神の子としていただくこと」であり、「からだが贖われること」であると述べています。そして、それをこそ私たちは待ち望むのだと述べています。

私たちは現実の中に苦しみます。また見える必要を求めています。イエスさまはそれを否定していません。多くの人々の問題に寄り添い、病をいやし、「求めなさい。そうすれば与えられます」（マタイ 7:7）とも言われました。見える必要について求めることは正当です。

今ここで、「目に見える望みは望みではありません」といっているのは、究極的に求める方向が示されているのです。存在の核からもたらされる、平安、喜び、希望、愛といったものが示されています。それをもたらす救いを待ち望みましょう。自らのうめき、悲しみ、苦しみを、神の前では隠さずに、告白していきましょう。そして、真に神の子にしていただき、存在のすべてが贖われることを待ち望んでいきましょう。この望みよって私たちは救われるのです。